

# Data and Art

緑川雄太郎

## 『アートワールドがデータになるとき』

AQV-EIKKKMによる『アートワールドがデータになるとき』は、アートの価値を問う。アートの価値は押し並べて不可解だ。高額な作品に関するニュースに耳を疑うこともあるだろうし、そもそもアートに夢中になる理由が全くわからないこともあるだろう。AQV-EIKKKMは、データに基づいたアプローチを行なっている。アートの価値はビッグデータから定量化されるのだろうか。定量化されたデータは、アートワールドを変えることがあるのだろうか。データを計算するアルゴリズムは、次のアートと結びつくのだろうか。『アートワールドがデータになるとき』を読み解くことで、わたしたちはどこに辿り着くのだろうか。

## オフィス

この空間に入ってまず目につくのは、デスクだ。デスクには3台のモニターが置かれている。株を扱うトレーダーのようなしつらえだ。どうやらここはAQV-EIKKKMのオフィスらしい。ただここは、輸入食品の在庫管理のためのオフィスでもなければ、動画制作会社のオフィスでもなさそうだ(ひとつしかないデスクとこの空間の広さの異様な不均衡は「利潤の追求」と合致していない)。壁にはいくつものペインティングが並んでいる。それは数字が記載された白い部分と色分けされた部分に分かれている。机の上のモニターをよく見ると、その右画面に、このペインティングと同じような画像が表示されていることがわかる。そこにはその色分けされた部分が何を意味しているかが記載されている。色が赤くなればなるほど数値が高いことも示されている。それらを総合すると、各ペインティングは、一人のアーティストのデータが可視化されているということだろうか。プロジェクションが映し出すイメージは、何かの相関図を示しているようだ。そのすぐそばのガチャに目を向けると、何かが入っている。この空間は一体何を意味しているのだろうか。

## デモクラシー

モニターの画面を参考にすると、2から5まではSNSの数値を示していることがわかる。その内2と3はフォロワー数だ。赤くなればなるほどフォロワーの数が多く、青くなればなるほど少ない。プロジェクションされたイメージは、SNS上のフォロー関係を示しているネットワークだ。中心に近づけば近づくほど影響力が高い。ここには民主主義が反映されていると言える。言わずもがな、民主主義的世界は多数決によって構築されている。票をより多く獲得した者が政治を司る。客が来ない飲食店は店を畳む。このようなデモクラシーは、アートワールドにおいても重要視されることがある。フォロワーが多いアーティストは偉いと思われ、少ないアーティストは信用できないと思われる。ただAQV-EIKKKMは、このような価値観自体をここで強調しているわけではない。それは単なる色分けとして描かれている。アートにおける民主主義は、主にフランス革命以降の概念だ。2019年以降、民主主義国家よりも非民主主義国家の方が過半数を占めていることがV-Demの調査によって明らかになった。民主主義の危機が議論されている現在、アートは民主主義をアップデートするのだろうか。あるいは別の道を辿るのだろうか。

## キャピタリズム

ペインティングの6から8はオークションに関係している。とりわけ8は、過去3年間のオークションでの落札予想価格を何%オーバーしたかが示されている。つまり、色が赤いほど落札予想価格を上回っているため、次のオークションも高騰することが予想される。青くなればなるほどその見込みは低い。ここには資本主義が反映されていると言える。利潤の追求する株式会社は、売り上げ成長率が前年比100%以上である必要がある。このようなキャピタリズムは、アートワールドにおいても重要視されることがある。価格の高いアーティストは偉いと思われ、少ないアーティストは信用できないと思われる。この評価はペインティングとネットワークにおいても反映されている。ここでもAQV-EIKKKMは、データを色分けしているだけで、

その価値観自体を問うているわけではない。前述の民主主義と同様、資本主義も危機に瀕している。取り返しのつかない事態に陥る前に、人類は資本主義をアップデートできるのだろうか。このネットワークは現在の価値指標に基づいて構成されているが、今後この容態はどのように変容するのだろうか。

## コンティンジェンシー

データを重要視しているアーティストにも関わらず、ここにガチャがあることに違和感を覚える者もいるかもしれない。なぜならガチャは、何が出てくるか予測がつかないからだ。しかし実際のところ、予測不可能性はアートワールドにおいて幾許かの割合を占めている。例えば次のようなことはしばしば起こる。あるオープニングパーティで偶然出会った銀行員とキュレーターがその後ギャラリーをつくる。あるアートイベントで偶然出会った研究者とアーティストがその後アートのウェブサイトをつくる。このようなコンティンジェンシーを表象する要素としてガチャが置かれていると考えられる。しかしながら、定量的に評価の高いアートが「あらかじめ」ガチャに入っている時、それをコンティンジェンシーによるアートだと言えるのだろうか。たまたまアートと遭遇することは、アートワールドの外で成立するはずだ。あらかじめ決まった世界の外で、コンティンジェンシーに基づくアートはどのように成立するのだろうか。

## アートワールド

以上を考慮すると、ここはAQV-EIKKKMのオフィスであると同時に、データを通して見えるアートワールドということになるだろうか。壁面のネットワークは、そのアートワールドの状態を示している。ここはわたしたちが普段ギャラリーやミュージアムで体験するお馴染みのアートワールドとは異なる世界線のような。とりわけこのペインティングは、その文法に慣れるまでやや時間がかかるため、チューニングが難しいかもしれない。あるいはそれは人間の言語ではなく、データの言語だと言える。言わずもがな、データは現在、最も重要視されるもののひとつだ(「Data is the new oil」と言ったのは2006年のクライブ・ハンビーである)。と同時に、最も不可解なもののひとつである(「data is not defined」はコーディング上のエラーに限ったことではない)。データはアートワールドを変えるのだろうか。どのようなデータがどのようなアートワールドをどのように変えるだろうか。

## データ

AQV-EIKKKMは、インターネット上の膨大なデータを集積し、独自のアルゴリズムによってあるアートワールドを数値化し、その一部をこのオフィスで可視化している。それは「データから見るアートワールド」だと言える。データから見るアートワールドとしてのこのオフィスは、アートの価値そのものを示しているのではなく、アートの価値が何かをわたしたちに問うている。人と人が対面した状態で問うのではなく、データを経由して問われるため、そこには体温がほとんど感じられないかもしれない。しかし、データは体温でもある。例えば、フォロワー10000に対してフォローイング100と、フォロワー10000に対してフォローイング10000には温度差がある。前者のアカウントは、フォロワーよりもフォローしているアカウントを重要視していることが考えられる。なぜなら100人のタイムラインを追うことは可能だからだ。後者はフォロワーを重要視している。あるいは重要視していない。10000人のタイムラインを追うことは不可能だろう。データに宿る体温には、不気味な生々しさがある。その体温を観察しているAQV-EIKKKMには、それ以上の不気味さがあるとも言えるだろう。あるいは逆に、体温は今後、なくなるかもしれない。アートとデータの関係性はまだはじまったばかりだ。アルゴリズムの精度が進展すれば、アートの価値そのものにまで至る未来がやってくるかもしれない。それはもはや「データから見るアートワールド」ではなく、「データが見るアートワールド」だ。「アートの価値とは何か」。その最適解を出すために、人間が介在していない可能性は高い。あるいはAQV-EIKKKMが、「蕩尽と虚無をまたぐ」のかもしれない。

## アルゴリズム

アルゴリズムは、ある問題を解くための方法だ。例えばAmazonのアルゴリズムは、複雑な状況を計算し、最適な配達手順を配達員に通知する。その最適解を出すために人間は介在していない。2015年、ユヴァル・

ノア・ハラリは『ホモ・デウス』で次のように述べている。「芸術的想像力がアルゴリズムの進出を免れるかどうかはあやしい」。「データ至上主義者は人間の知識や知恵に懐疑的で、ビッグデータとコンピュータアルゴリズムに信頼を置きたがる」。「自動車が馬車に取って代わった時、わたしたちは馬をアップデートしたりせず、引退させた。ホモ・サピエンスについても同じことをする時がきているのかもしれない」。2022年、成田悠輔は『22世紀の民主主義』で次のような副題を添えている。「選挙はアルゴリズムになり、政治家はネコになる」。ラマルクやドーキンスを引用しながら、成田は『未来の超克』で次のテーゼに関する議論を展開している。「I. すべてがアルゴリズムになる」。「II. アルゴリズムは「法」である」。

「III. 見えない法」(文藝界2022年1月号)。人間がデータをつくり、そのデータが人間を動かし、そしてまたデータがつくられる。そして「はじまりと終わりや、内部と外部の境界をはっきり引くことが限りなく困難になる」とき、「法としてのアルゴリズム非実在論」が立ち上がる(文藝界2022年11月号)。未来を超克するために、成田は「大仏インターフェースの復権」を提示する(文藝界2023年10月号)。アートは今後、大仏インターフェース(「数百年から千年くらいの間時差を飛び越えた世代間コミュニケーションを仲介し、蕩尽と虚無をまたぐ」)を構築できるだろうか。AQU-EIKKKMはその価値を定量化できるだろうか。その価値は、誰(あるいは何)にとっての価値なのだろうか。予測不可能な未来において決してゼロではないボディブローのような可能性は、ガチャから出てきたコンティンジェンシーかもしれない。